



雪舟とサビエル

国民文化祭・やまぐちの特別企画として山口県立美術館で雪舟展が開催され、きょう十六日から後期の展示が始まりました。



山口市のサビエル記念聖堂前の

フランシスコ・サビエル像

前期だけの展示が四

点、後期だけは九点、後期の方が多くの作品が見られる。

今から五百年前の一五〇六年、この年に雪舟が亡くなり、サビエルが生まれた。

この巡礼記はサビエル生誕五百年を記念してのものであり「雪舟への旅」展は没後五百年記念の企画である。

雪舟とサビエルは直接の関係はないが、歴史的に見ると山口の地を舞台として両者はか

らんでいる。西の京・山口と呼ばれる栄華を築いた大内氏は雪舟の大スポンサー、サビエルは大内氏から布教の許可だけなく「大道寺」という宿舎まで与えられた。両者とも大内氏と強い関係がある。

る。日本と明との公式

交易は一四〇一年、足利義満の第一遣明船から始まった。そして一四六七年に第十二回遣明船が派遣され、雪舟は随行して明に三年間滞在した。交易の窓口、上海の南のニンポ

ー(寧波)から北京まで旅している。こうして水墨画をはじめ明の文化を吸収し、山口に

伝えたのである。今回展示されている「唐土勝景図巻」や「国々人物図巻」はまさに明の旅の報告絵巻

であり、スポンサーの大内氏にこれらの作品を見せながら報告したのであろう。

それから約五十年後、サビエルはその山口の地で、日本が文化をはじめいろいろなもので明の影響を強く受けているのを知り、中

国に行くことを決意したと言われる。

いったんインドのゴアまで行き、一五五二年四月、明に向けて出発したが、中国大陸を目前にしながらか上川島でその年の十二月、病死したのである。

ほぼ同じ時代を山口の地で過ごした雪舟とサビエル。雪舟展を見るために山口市に行き、龜山公園の高台から朝もやにかすむ美しい山口盆地を眺めた。

この風景と同じものを雪舟も、そしてサビエルも見ただに違いはない。鳥の鳴き声がし、大自然はほとんど何も変わっていない。しかし、人間の歴史はこの五百年で大きく変化した。

過去の歴史を、単なる過ぎ去った出来事としてでなく、自分の手

の温も

りの中

で暖め

る時、

歴史は

今の私

たちと

ともに

息づい

てくる

ような

気がする。

そして、なぜか聖書の

の一節を思い浮かべた

のである。

「心の貧しい人は幸いである。天の国は彼らのものである。」(マタイ・五章)

心の貧しい人は幸いで

ある「貧しさ」。私は雪舟の水墨画の中にその貧しさを感じた。

素朴な白と黒の中に

何と深みのある美しさ

だろうか。現代の豊かさ

が薄っぺらに感じら

れる。



雪舟7歳の自画像

雪舟展を見たあとサビエル記念聖堂を訪ねた。聖堂前のサビエルの像は澄みきった秋空の中に静かに建っていた。

聖人サビエルの生涯は心の貧しさとともに旅した巡礼であった。画聖雪舟の生涯もまた、旅する人の巡礼だったような気がする。雪舟展は今年三十日までである。(元山口放送取締役ラジオ局長)